

平成 30 年度文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業
日本漫画家協会所蔵本および資料の
調査整理・データベース化事業

報告書

公益社団法人 日本漫画家協会

平成 31 年 3 月

目次

第1章 総評（幸森軍也）

第2章 協会所蔵本データベース化、マニュアル化（池川佳宏）

第3章 会報のデジタル化、見出しデータ化（池川佳宏）

第4章 音声テープのデジタル化（幸森軍也）

第5章 日本漫画家協会収蔵品調査及び整理作業（小田切博）

第6章 平成29年度「ポスターに見る漫画展黎明期」展（池川佳宏）

第7章 平成30年度「日本漫画家協会賞の歴史」展（小田切博）

第8章 今後の展望の課題（小田切博）

執筆者略歴

第1章 総評

幸森軍也

これまで公益社団法人日本漫画家協会が所蔵する資料、すなわち書籍と冊子やマンガ展ポスターなどに注目してデータベース化、デジタル化をおこない保存に努めてきた。これは文化庁メディア芸術データベースとの統合を目指し、国内のマンガ関連資料のさらなる充実を図る目的があつたためである。漫画家協会には国立国会図書館はもとより他のマンガ図書館等にも保管されていない資料が多く存在している。

設立以降収集してきた書籍等やポスターは協会内部のデータベースに収録することにおむね成功、資料保存の目的は達成されたと考えられる。平成29年度にはその成果として漫協ギャラリー(事務局の1階部分)において平成31年2月26日から3月30日まで「ポスターに見る漫画展黎明期」展を開催した。近年は追い切れないほど開催が増えたマンガ展にもかかわらず、展覧会に注目した研究はほぼなされていない。マンガ展に関してポスターやチラシ、DM等のデータを最も多く持っているのは漫画家協会である。これら画像の公表については著作権等の問題もあり、可能なデータから検討をはじめていく予定である。

しかしながら寄贈され送付されるこのような各種資料は漫画家協会会員をはじめ他の組織が活動している限り途絶えることなく増え続ける。これら資料を事務局において日常業務的にデータベースに追加していく方法論も確立していく必要があるだろう。今年度はそのデータベース・アップデートのマニュアルに関しても検討した。これについては第2章で触れる。

平成30年度は上記データベースのアップデートに加えて、日本漫画家協会報(以下「協会報」という)のデジタル化、見出しデータベース化といくつかの実験をおこなった。実験の一つは音声テープのデジタル化である。上述した書籍やポスター等の紙資料に加えて、漫画家協会には音声テープ、ビデオテープ、写真ネガフィルムなど非紙媒体資料も多く保存されておりどれも貴重な資料であることは論を待たない。前年度に一部のデータ化を試みたものの写真は一定程度は整理されており被写体らの高齢化の問題はあるものの、保存の点では緊急性は低い。本年度は緊急性が高いと目されるマイクロカセット形式の音声テープを実験的にデジタル化した。詳細は4章に記す。

もう一つの試みは寄せ書きの調査である。漫画家協会ではマンガ賞やその選考会等のマンガ家が参加する催しの際にイラストボードなどを用意して寄せ書きを依頼していた。これらが相当数保管されており、その来歴の調査と保存方法に関しても検討した。これは第5章に記載した。

協会報は日本漫画家協会が設立された1963年の翌年からほぼ季刊で発行され続けており、現在では240号に達する。時代によって多少の差異はあるものの、主としては理事会の報告や会員の新刊書籍や催事(展覧会、海外との交流など事業)の告知・報告、財務諸表、

日本漫画家協会賞の発表など共通項目も多く存在する。前年度までにデジタル化し、データベース化し保存に努めてきた書籍や冊子または展覧会などは実はほとんどすべて協会報にも掲載されており、協会事業である日本漫画家協会賞の設立の経緯や選考過程、受賞者名、作品名。さらには受賞者の言葉なども収録されている。

今年度は協会報から日本漫画家協会賞を拾いあげ、歴史や受賞作をパネルにして漫協ギャラリーに平成31年2月25日より展示した。

協会報の調査で自身の活動はいうまでもなく、マンガ文化全体が見わたせる。

第2章 協会所蔵本データベース化、マニュアル化

池川佳宏

<所蔵する書籍資料のデータベース入力作業>

平成28年度事業にひきつづき、日本漫画家協会地下書庫に所蔵されている書籍資料のデータ入力作業を行った（作業手順については平成28年度報告書を参照）。今年度はまず、平成28年度から途中になっている書庫内資料の続きの登録作業を最後まで行ったのち（海外資料など一部資料を除く）、手狭になっている棚の構成を変更した。具体的には、カートゥーン系など一部の書籍資料を移動して棚の余裕をつくり、この2年間で新規追加された書籍資料（単行本・雑誌・その他の冊子）について、棚へ追加していく方法をとった。

今年度も、新たな入力作業者のために池川がメディア芸術データベースの入力規則のレクチャーと入力作業監督を行った。その結果、今年度のデータ入力件数は「単行本」が2908冊、「その他の冊子」が11冊、「雑誌巻号」が47冊となり、書庫全体として、3カ年で累計9299冊のデータ入力が終了した。今年度事業の終了時では、棚への新規追加分がやや残るほか、海外資料とカートゥーン系など他書庫へ移動した書籍資料が未解決である。

<データベース入力作業のマニュアル化>

協会では、進化会員の入会などに伴い新規蔵書が増えるため、書庫内の書籍資料の入力管理は今後の協会内作業として引継ぎルーチン化する必要があり、そのためのマニュアル化を行った。書庫管理と並行して協会会報の「事務局ライブラリー」記事の作成を行うことで、定期作業として二度手間にならずルーチン化させる方法について、事務局と相談の上で下記のフローマニュアルを作成した。

●日本漫画家協会 書庫単行本登録フローマニュアル

■棚管理について

地下書庫にはアルファベット（棚番号）がふられた棚があり、作者別にあいうえお順にまとめられている。新規会員が増えるたびに次々と追加されていくため、配架されている位置は常に移動することを前提とする。

■管理番号ルール

- ・1冊ずつ（セットものはISBN単位）に管理番号をふる。同じものが2冊あっても個別に管理番号をふる
- ・「棚番号（a～v）+数字5ケタ+分類(A～C)」を付与する。

- ・棚番号は目安としてのもので、配架が移動するため実際とは異なる場合がある。
- ・数字部分は連番で付与する。数字は重複させない。除籍する場合は欠番扱いとして再利用しない。
- ・分類は単行本（ISBN があるもの。コンビニ本やムック、見た目が雑誌でも確認する）を「A」、雑誌（ISBN がなく、かつ雑誌コードや巻号のあるもの）を「B」、その他の冊子（A・B 以外の自費出版本や同人誌、公共出版物、パンフレットなど）を「C」とする
※「アックス」「ITAN」「ユリイカ」は ISBN があるが雑誌扱いとしてよい

■送付から入力作業、配架まで

- 1) 会員から送付された単行本を作者順にして棚番号を確認する。棚番号とシートの続きの数字と分類で管理番号を分類の A～C で色分けしたフセンに記入して単行本に貼る。
- 2) シート（分類 A～C 別に異なるシートがある）に書誌を入力する。一番右に「入力日」、「入力者」、「漫協ライブラリ掲載」、「会報記載」、「別置・廃棄」の 5 列を入力
- 3) 書影をとり、単行本を棚に配架する。フセンは後にビニールカバーまたは PP 袋に貼り変えることが望ましい。
- 4) 月毎に漫協サイトの「漫協ライブラリ」用に下記の列を使用する
「◆壬生義士伝 8 ながやす巧／漫画 浅田次郎／原作 ホーム社／刊 690 円」
列の抜き出し
「単行本名」「追記」「巻」「責任表示」「出版社」「価格」
→「／著」「／刊」などの表記は適宜訂正する
- 5) 会報へは「漫協ライブラリ」用のデータをまとめて掲載する

■メンテナンスについて

- ・重複本などを廃棄する際には、シートの「別置・廃棄」列に「廃棄」を入れる
- ・巻数の長いものを別置する場合、シートの「別置・廃棄」列に「別置」を入れる

第3章 会報のデジタル化、見出しデータ化

池川佳宏

<会報のデジタル化>

平成28年度事業において、協会内に保存されている「会報」の所蔵状況と内容の調査を行った。日本漫画家協会の会報は、協会設立すぐの1965年に第1号が創刊され、2019年3月までに240号が刊行されている。今年度は、このうち、2017年末までの235号までの会報と、会報に不定期に同梱配布されている「漫協目安箱」などの付録冊子について、スキャンによるデジタル化を行った。2000年代以降はDTPデータによる入稿が行われているものの、校正によって印刷所で文字の追加修正が入ることがあり、協会で所持しているDTPデータが最終版でない可能性が高いことから、発行された実物の冊子をスキャンし最終版として保存することとした。

スキャン作業はオリジナルの冊子をカラー600dpiでスキャンを行い、tiff形式でページごとに保存した。また、閲覧用にこれをサイズダウンし冊子(号)ごとにまとめてPDF化したものを別途作成し、さらにOCR(光学的テキスト認識)による簡易テキスト埋め込みを行った。なお、会報の一部にはオリジナルのコピーからスキャンを行ったものや、元々ハガキサイズで冊子状でないものもある。合計で247冊(会報本誌と付録冊子の合計)を画像化・PDFファイル化し、スキャン画像数は総計で3259枚となった。

<会報の記事見出しのテキストデータ化>

50年以上続いている会報の情報は、協会の運営記録だけでなく漫画家が発信した情報として漫画史において非常に貴重な記録が含まれることから、会報の見出しを記録し、記事を検索できるようテキストデータ化を行った。会報の1冊を雑誌巻号とみなし、メディア芸術データベース(開発版)へ投入できる形式で記事の見出し(目次)を入力した。

ただし、メディア芸術データベース(開発版)の雑誌の目次項目は、あくまで著者と作品名を項目とした「作品」を入力・検索させるためのものであり、「書かれた人・事柄」を検索したい「記事検索」とは目的が異なるため、既存のメタデータ項目がややかみ合わないところがある。そこで、メディア芸術データベース(開発版)の「雑誌目次テーブル」の入力項目を下記のようにメタデータの解釈を変更して入力を行った。

- 著書項目のうち【協力者】・・・「書かれた人」を入力(インタビュイーなど)
- 【作品名】【サブタイトル】・・・それぞれ「見出し」「小見出し」を入力
- 【備考】・・・記事に記事以外を含む場合「写真あり」「カットあり」「図版あり」などを入力(著者もわかれれば入力)。
- 【分類】・・・記事分類として「記事」「イラスト」「写真」「表紙」「連載」「訃報」「変更」「広告」に分類した。「訃報」「変更」は協会会員の情報の分類で、「広告」は出稿してい

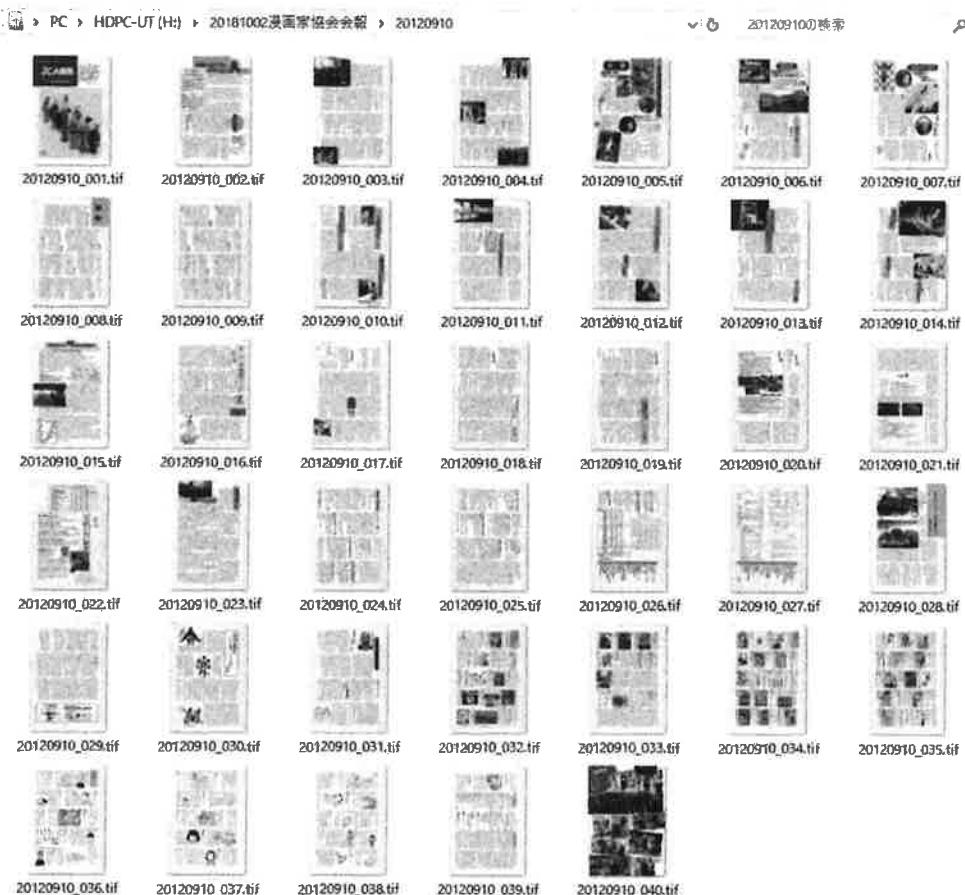
るスポンサー名を入力した。

入力作業については、巻号ごとにバラツキがあるため文字数での作業コストを算出した。実際の作業は、不定形のカコミ記事から見出し・小見出しを人為的に判断して入力するため、通常の文字入力と異なりコストが高くなっている。前述の 247 冊に対して、総合計で 1,147,275 文字を入力した。

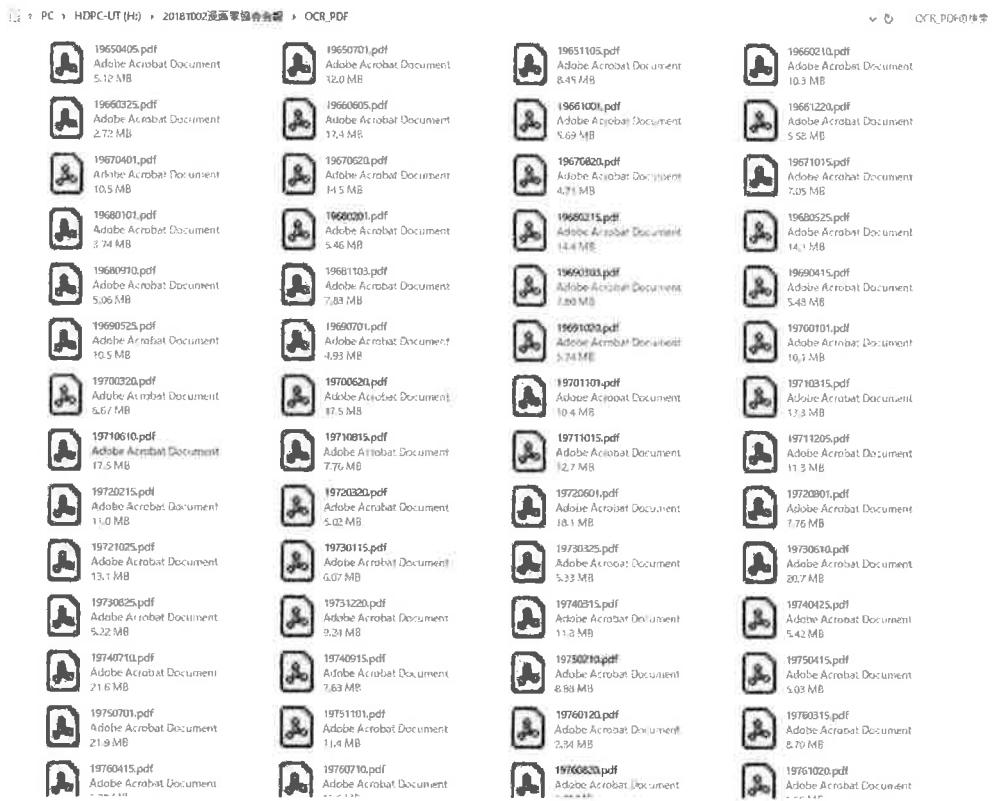
また、号ごとの巻号情報は「雑誌巻号」メタデータに合わせて入力した。「漫協目安箱」については同様元の会報の「別冊付録」とし、独立した冊子として登録している。

会報デジタル化の例

会報 214 号 tiff ファイルフォルダ画像



会報 PDF 一覧 フォルダ画像



第4章 音声テープのデジタル化

幸森軍也

会議等のアナログ音声テープをデジタル化する第一義は記録保存であろう。カセットテープは長期間の保存に向かない。音声を再生することで発言者の声、口調、場合によっては性格などもわかる。

第二に当該会議の過程を再現できる点。発言録がなくとも音声データが残っていることで会議内容が明確になる。ただ、過程を記録する必要があるならば音声テープから会議の直後に発言録を作成する方が有意義と考えられる。もっとも、発言録の作成には多大な労力を要するため議会などならともかく漫画家協会ではそこまでは不要であろう。この点で記録保存目的をもって簡易な音声データを探つておくことに一定程度の理解は示せる。

業者の説明によると、マイクロカセットテープは再生機の製造が終わり再生する方法がなくなりつつある。また120分テープもテープ自体が薄いため再生時に破損が起きやすく、断絶した場合その部分の再生は絶望である。そのため音声テープのデジタル化は可能ならばすみやかに処置した方がよい、とのことだった。マイクロカセットテープのデジタル化は費用面では8万円弱。すなわち1時間1万円かからない。これを高価と考えるか安価と考えるかは内容の重要度になるだろう。著名なマンガ家の肉声に価値があると考えるならば、音声保管にも意味がある。映像であればなおさらだろう。

漫画家協会に保管されていたマイクロカセットテープは全部で5本あった。他にも通常のカセットテープが何本か存在する。今年度は最も緊急性が高いマイクロカセットテープのデジタル化を事務局の許諾を得て試みた。いずれも録音時間は約1時間から1時間30分くらい。テープに貼付されているインデックスメモを見るとマイクロカセットテープ5本とも「第〇回理事会」とあった。理事会の音声は現在でも録音されている。

現時点でのテープを聞くと、発言内容が明確であったとしても声や喋り方によほど特徴がない限りは発言者を特定できない。ただ、この「第〇回理事会」との情報から開催日時と参加者を推定できる。当該理事会の内容は紙ファイルに資料や議事次第、議事録が保管されており、議決について協会報にも掲載されているためテープから判明するのは過程であろう。その理事会開催時のもしくは出席していた理事をリストアップすればある程度は発言者特定の指針になる。

一人の発言が終わって別の発言が再開する形式となっているものの、議論が紛糾したり怒号が飛び交うような状態だと(それはそれで興味深いけれども)音声からだけでは発言者特定は絶望的である。現在の理事会の出席者数は20名ほど。彼らを音声だけでそれぞれ区別するのは不可能に近い。今回デジタル化した中にはそのような状態のテープはなかった。ただ、議事終了後に出席者たちが雑談はじめたりした際の会話の再現を必要のあるなしにかかわらず文字起こしすることはかなり難しい。講演やシンポジウムのような少人数が

話している録音はともかく、宴会やパーティーなど不特定多数の参加者が三々五々会話をするような場合は、記録保存としては向かないことがわかった。

貴重さの度合いを考えると音声データは映像にはかなわない。けれども賞の授与式等の式典のように会場も出席者も公的な意識を持って参加しているならともかく、会議のような閉じられた会合をいちいち映像で残すのも大げさであろう。この点で、音声記録の保存は次善の策として重要な資料といえる。

理事会は意思決定機関であり結果がすべて。発言の記録が音声で残っているため不要と考えられているからか発言録はこれまで作成されていない。テープにインデックスメモは貼付されているけれども、中身とメモが合致しているか否かも再生しないことには確認できない。議事次第や出席者名を記したやや詳細なメモなどとともに理事会ファイルに保管しておくと利用の際にさらに有益である。

冒頭に記したように再生機の製造中止による死蔵を避けるためには、時代時代で再生可能なデータに変換しておく必要がある。たとえば漫画家協会にも保管されている 3.5 インチフロッピーディスクは今の時点では再生装置はまだ存在するものの、書き込まれている様式(マッキントッシュ用なのか DOS 用などのなど)が不明だと読み込みができたところで実は再生は困難である。ましてや Z i p や 8 インチフロッピーディスクのように稀な記録媒体だと再生装置を探すのも骨が折れる。音声記録もテープだけでなく、DAT や MD などもあった。

現時点で再生できる様式に変換しておけば、あと十数年は現在の様式で再生、閲覧可能である。

音声のデジタル化を行ったマイクロカセットテープ



第5章 日本漫画家協会収蔵品調査及び整理作業

小田切博

本事業ではすでに書籍資料の書誌データ登録、ポスター資料のデジタル化などをおこなつてきただが、本年度はおもに今後電子化などの保管や記録が必要とされるであろう原画や寄せ書きなどの絵画的収蔵品の現状把握のため、協会2F事務所、書庫部分を除く地下倉庫の各収納スペースの収蔵状況調査をおこない、地下倉庫に関しては原画、寄せ書き類の保存状態改善のために収納スペースの整理作業をおこなった。また、原画、寄せ書きに関しては、撮影し、簡単なデータ採取をおこなっている。

< 1 > 各収納スペース調査

各収納スペースに対して任意のIDを付与し、そのスペースに収納された収蔵物を撮影し、現状を以下のようにまとめた。

(1) 日本漫画家协会 2F 事務所

2F 事務所に関しては地下倉庫調査の予備試験的な意図でおこなっているため、すべての収納スペースに関して調査をおこなったわけではなく、書籍や写真資料がまとまっている棚のみを対象にしている。

日本漫画家協会 2F 棚

1	2FA	2FB	2FG	2FH
2	2FC	2FD	2FI	2FJ
	2FE	2FF	2FL	2FM

2階棚 1

- 2 FA カセットテープ、領収書、未使用色紙、未使用巻物
- 2 FB 協会賞プレート、協会賞胸章、協会バッジ、協会賞旗、はさみ、文房具
- 2 FC 関連書籍、アルバム、色紙、寄せ書き、写真、小物
- 2 FD 会報、HP用資料、会報団版、賛助会員資料、漫画館・美術館資料、案内状、手紙、チラシ、資料、小物
- 2 FE アルバム、フィルム、写真、カット、ネガ、ポジ
- 2 FF 会員資料、交流団体発行物、交流団体資料、協会賞資料

2階棚 2

- 2 FG 協会賞受賞作品
- 2 FH 協会賞受賞作品
- 2 FI 協会賞受賞作品、小物、色紙、写真
- 2 FJ 協会賞受賞作品、協会資料
- 2 FL 協会賞受賞作品
- 2 FM 協会賞受賞作品

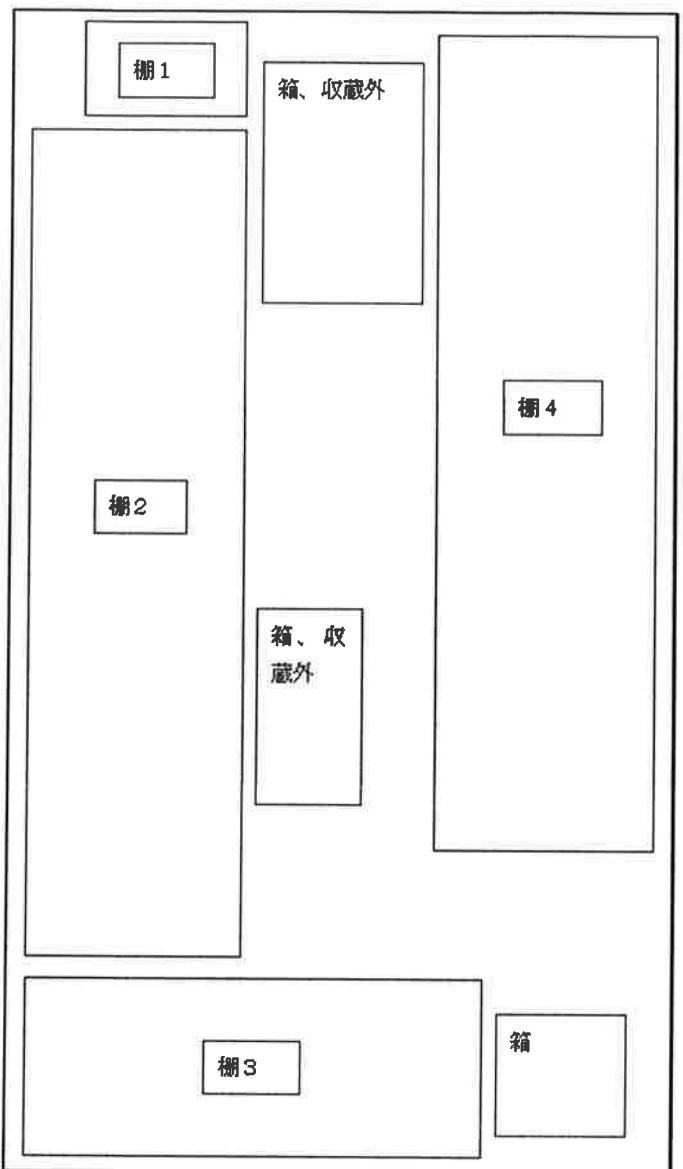
(2) 日本漫画家協会地下倉庫

地下倉庫に関しては調査後、縦置きされていた原画、寄せ書きを横置き保存するために棚の整理、移動をおこない、レイアウトの変更をおこなっている。このため、整理、移動後の内容についても記述する。

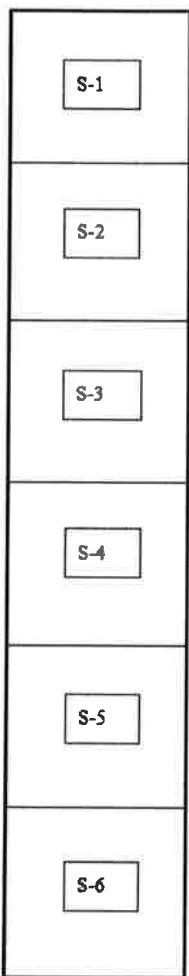
日本漫画家協会地下倉庫（書庫部分を除く）



地下倉庫フロア A

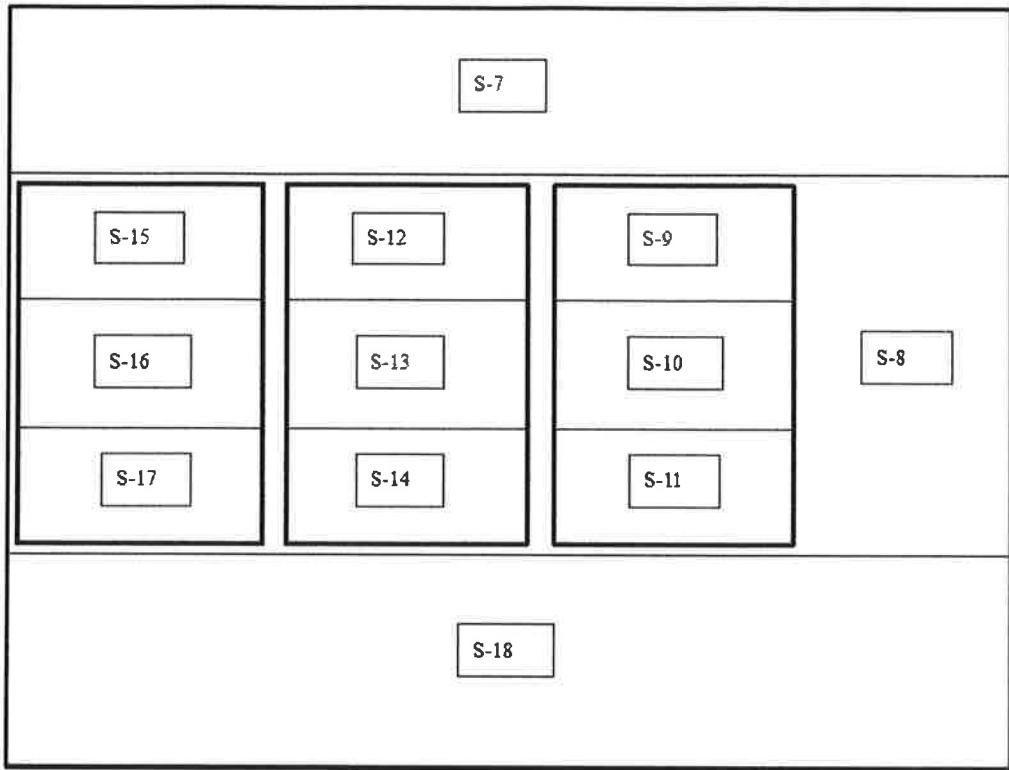


地下倉庫フロア A 棚 1



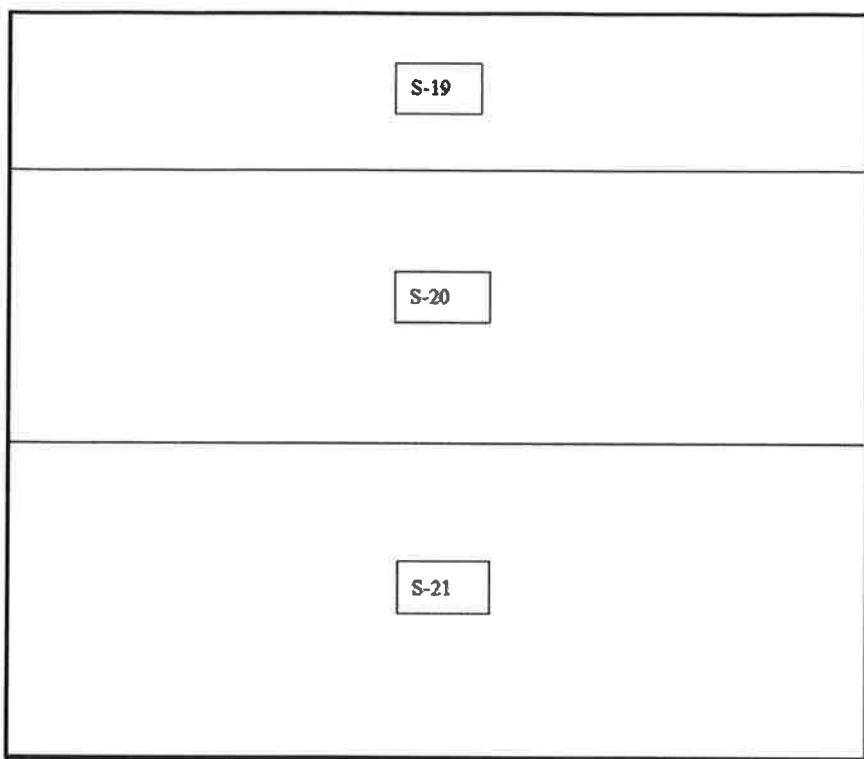
- | | |
|-----|----------------|
| S-1 | FAX、メール |
| S-2 | 展覧会案内状、新会員作品資料 |
| S-3 | 展覧会案内状、年賀状 |
| S-4 | 展覧会案内状 |
| S-5 | 展覧会案内状 |
| S-6 | 会員からの手紙 |

地下倉庫フロア A 棚 2



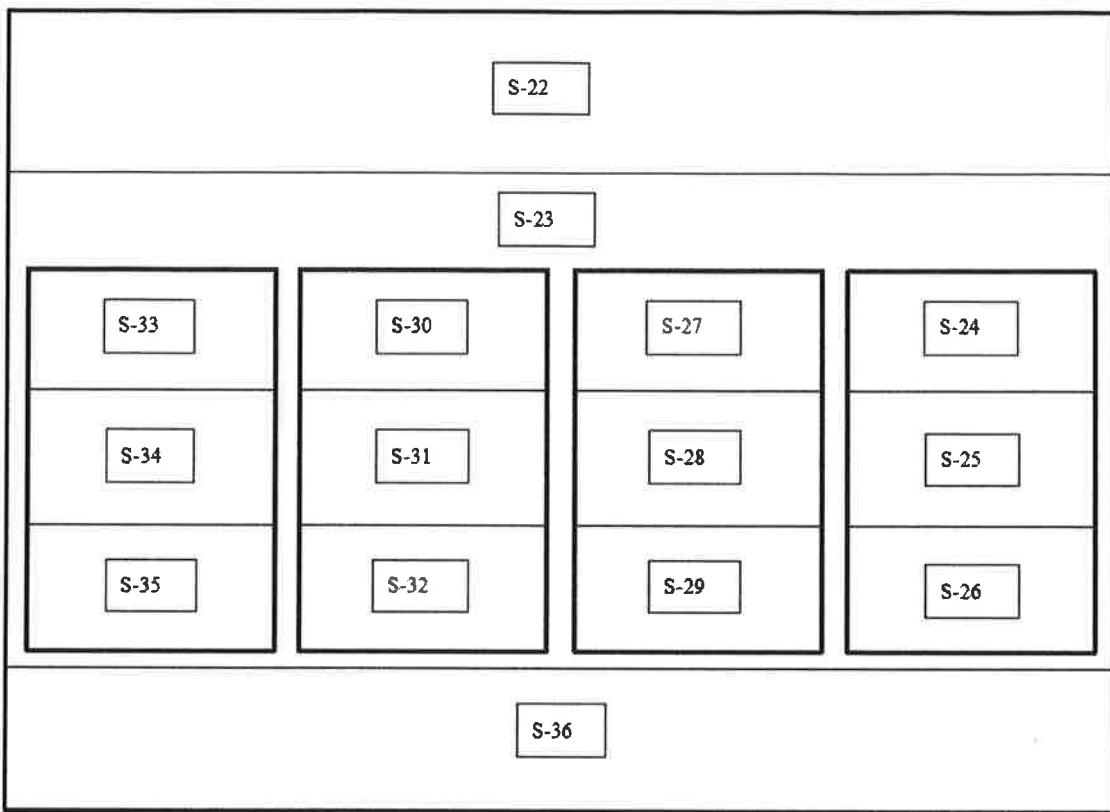
- S-7 FAX、芳名帳、電報、領収書、会計資料
S-8 原画、寄せ書き > 整理後フロア B 棚 2 S-7、S-8 に移動
S-9 会計資料
S-10 会計資料
S-11 会計資料
S-12 理事会資料
S-13 会計資料
S-14 会計資料
S-15 理事会資料
S-16 会計資料
S-17 入会申込書
S-18 原画、会員名簿、グッズ、ビデオテープなど > 整理後原画をフロア B 棚 2 S-7、S-8 に移動。フロア B 棚 2 よりイベントグッズ類を移動。

地下倉庫フロア A 棚 3



- S-19 会計資料、法人化関連資料、業務日誌
S-20 協会賞関連資料、郵便物、写真、ネガフィルム、設立時資料、連絡メモ
S-21 会報、スクラップ、雑書類、40周年カタログ関連

地下倉庫フロア A 棚 4



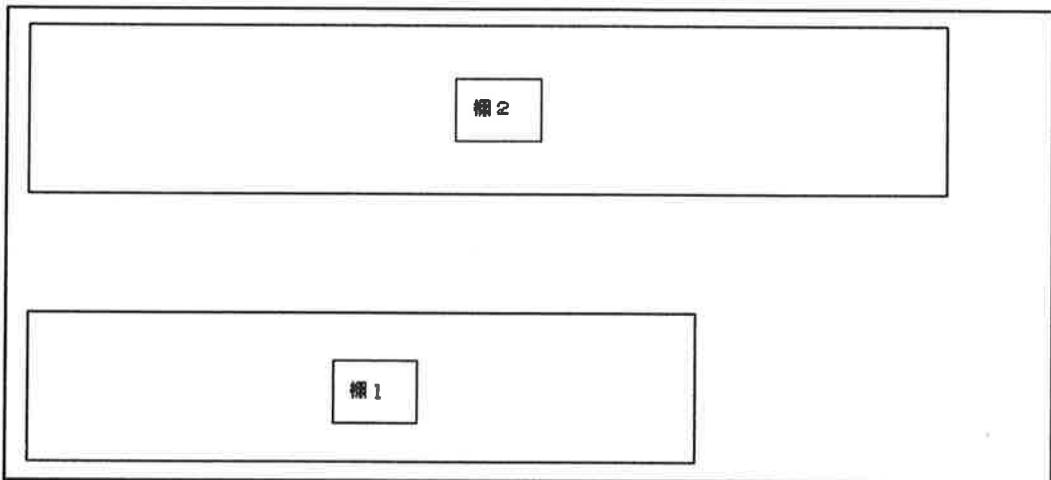
- | | |
|------|--------------------|
| S-22 | 会報原稿、漫画家個人史、寄贈資料類、 |
| S-23 | 出欠はがき |
| S-24 | 総会、協会賞関連 |
| S-25 | 総会、協会賞関連 |
| S-26 | まんが甲子園、まんがサミットなど |
| S-27 | 文部科学大臣賞、文化庁関連 |
| S-28 | 役員関連 |
| S-29 | 郵便関連 |
| S-30 | 事業報告書 |
| S-31 | イベント関連 |
| S-32 | 公益法人、物故者関連 |
| S-33 | 国際交流関連 |
| S-34 | 著作権関連 |
| S-35 | スクラップ、雑資料、キークースなど |
| S-36 | 協会賞、役員選挙投票関連、作家関連 |

箱、収蔵外

- B1 切り抜き、寄せ書き他、雑資料
- B2 はがき
- B3 はがき
- B4 はがき
- B5 領収書
- B6 イベント資料
- B7 事業関連資料
- B8 イベントなど雑資料
- B9 協会賞選考会選出用紙

収蔵外 冊子、ファイル等その他雑多な資料

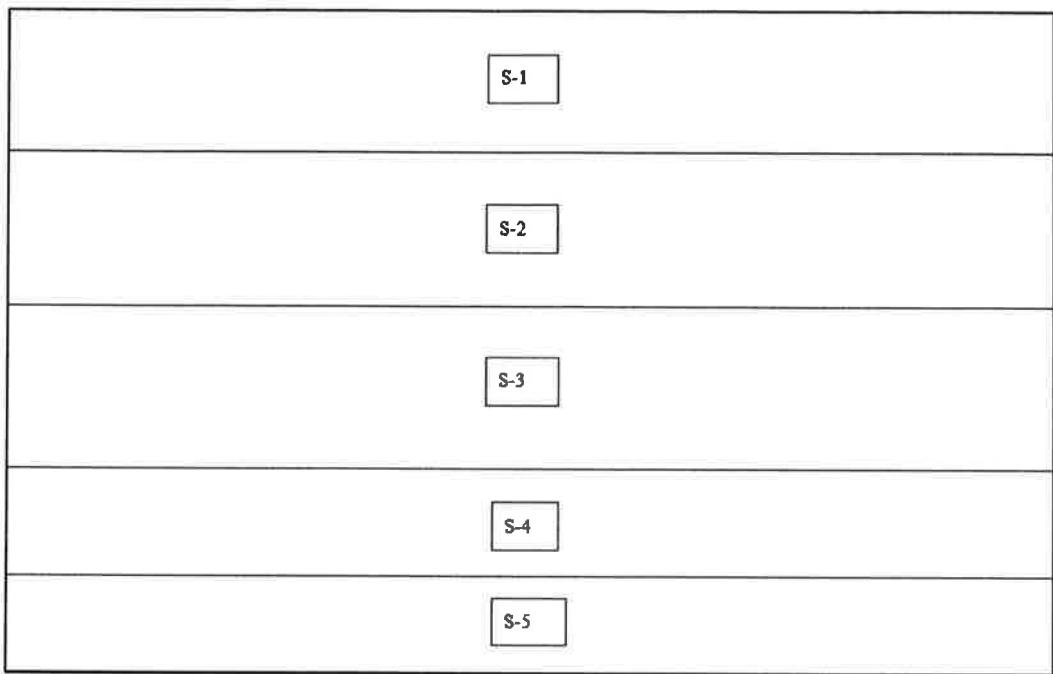
地下倉庫フロア B



* フロア B は床置きに多数大きなサイズの収蔵外の物品が存在。



地下倉庫フロア B 棚 1



- | | |
|-----|--------------------------|
| S-1 | 電気バケツ、寄せ書きされた箱、パンチ |
| S-2 | イベントパネル、パンチ |
| S-3 | イベント展示物、パンチ |
| S-4 | 協会賞寄せ書き、ルーマニアマンガ展原画?、パンチ |
| S-5 | イベント販売グッズ、パンチ |

地下倉庫フロア B 棚 2

	S-6
S-7	S-11
S-8	S-12
S-9	S-13
S-10	S-14

S-6 ポスター

S-7 役員選投票用紙、加藤芳郎さんを偲ぶ会配布冊子、寄贈資料、寄せ書き、色紙、協会賞募集要項、スナップ写真、カメラフィルター、カメラリモコン、協会賞メダル、名札、雑書類>不要と思われる物品を整理、整理後原画、寄せ書きをフロア A 棚 B から移動

S-8 ポスター用未組み立て箱、ポスター、イベント旗、イベントグッズ類、色紙>不要と思われる物品を整理、整理後原画、寄せ書きをフロア A 棚 B から移動

S-9 経理書類、協会旗（社団法人時）

S-10 チラシ類、広報原稿、FAX、芸術文化振興基金資料、感謝状、著作権関連文書、陶器

S-11 額装パネル、原稿バッグ、梱包用段ボール

S-12 展示用額装済みプリントアウト、アクリルパネル破損品、賞状用紙、展示用プリントアウトファイル、未使用イラストボード、ひも、芳名帳、代々木アニメーション学院入学案内、名札、ハッピ、梱包用段ボール

S-13 テレビデオ、ホームページ用会員プロフィール、ハレパネ、展示用プリントアウト、額、額装用パネル、胸章、協会旗（公益社団法人時）、展示固定用三角コーナー、杉浦家葬儀引き出物、名札、筒、協会 10 周年記念誌、感謝状、写真>テレビデオを 3F に移動

S-14 工具箱、杉浦幸雄油絵、イベント資料、石森プロからの荷物

収蔵外

やなせたかしイラスト入り段ボール空き箱、原画、ポスター、寄せ書き、展示パネル、額装済みポスター、額装済み写真、撮影スタンド、トキワ荘ふすま

< 2 > 原画・寄せ書きデータ採取

原画・寄せ書き資料に関しては調査の結果 180 点弱の所蔵を確認した。内容的にはイベント等での寄せ書き、ライブドローイング、日本漫画家協会賞への応募作などが大半であり、非常にサイズが大きなものが多い（下図参照）。



このため、デジタルスキャンでの電子化で対応するのは難しい資料が大半であり、電子データでの保存をおこなう場合は専門の業者に依頼しての写真撮影によるデータ化が必要になると思われる。

撮影した原画、寄せ書きに関しては以下の項目について可能な限り情報を採取し、リスト化した。

ID : 4 ケタの任意の管理番号

作品／寄せ書き : 原画作品か寄せ書きか

イベント名 : 当該画稿が描かれた催し

実施日時 : イベント開催の年月日

合計枚数 : 当該イベントでの画稿の枚数

同日作成寄せ書き ID : 同日作成された寄せ書きが存在した場合の任意の ID

参加作家名 (作品／キャラクター名) : 描いている作家、描かれている作品、キャラクター

参加人数 : 描いている作家の人数

素材 : 描かれている素材

画材 : 描いている画材

サイズ : 大きさ

第6章 平成29年度「ポスターに見る漫画展黎明期」展（平成27年度・28年度成果発表）

池川佳宏

2015・2016年度事業の成果のひとつ「協会所蔵のポスターのデジタル化」に関連して、協会が保存している1968～1992年の漫画展ポスター資料を展示し、現在につながる大規模な漫画展の黎明期の状況について紹介した。

主催：公益社団法人 日本漫画家協会

展示期間：2018年2月26日（月）～3月30日（金）

会場：日本漫画家協会 1F ギャラリー

コーディネーター：椎名ゆかり

調査・キュレーション：（株）寿限無 池川佳宏

協力：幸森軍也、小田切博、原正人

展示内容

○1968年「漫画100年」展ポスター

池袋西武百貨店、大阪阪神百貨店、奥道後など4種類

○「漫画100年」展ポスターのイラスト担当。水野良太郎氏による「漫画150年」をテーマにした描き下ろしポスター

○1980年代「マンガ博覧会」ポスター

渋谷東急百貨店（1981年）、上野の森美術館（1982年、1983年）など4種類

○1986年「世界まんが博」ポスター 大阪駅前広場2種類

○1990年「サンシャインシティのゴールデンウィーク サンシャインまんが博'90」ポスター 池袋サンシャインシティ

○1991年「地球環境まんが博」ポスター 池袋サンシャインシティ

○1991年～1992年「まんが大博覧会 作家500人展」ポスター 4種類

池袋サンシャインシティ、大阪エキスポランド、名古屋三越栄本店など4種類

○1992年「大漫画展」ポスター 国立国会図書館

○1968年「漫画100年」展の開催前後、また各展示会についての日本漫画家協会会報

○各展示会について、開催期間、会場、入場者数、展示内容などのテキスト紹介と、黎明期展示会とその後の展開についての解説

そのほか、3月24日（土）にギャラリートークを2回実施した。

第7章 平成30年度「日本漫画家協会賞の歴史」展

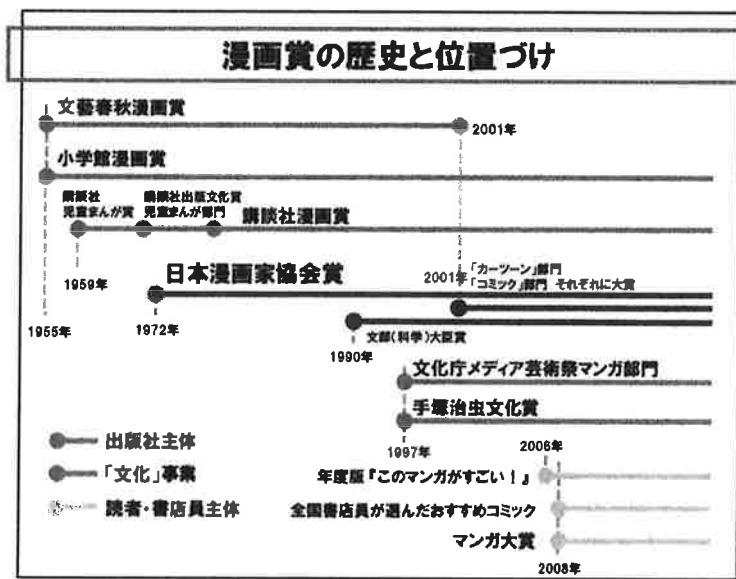
小田切博

日本漫画家協会と「マンガ」観の変遷

2000年代以降のマンガ研究の特徴のひとつとして、「マンガ」は本質主義的なある実体をもつたジャンル、メディアではなく、地理的、歴史的に規定されたコンテクストによって見出される可変的な概念なのではないか、という観点の導入があげられる。

たとえば現在の日本社会においては一般的に「マンガ」とはいわゆる「ストーリーマンガ」を指し、それが物語メディアであることがほぼ自明視されているが、70年代までの日本社会においてはこうした考え方が必ずしも主流ではなかった。むしろ美術的に「マンガ」の本質を一コマのイラストレーション的なスタイルの作品に求めたり、文学的な諷刺、報道的な時事性に求めたりする考えが当時は根強くあり(1)、こうした観点からマンガが論じられ評価されていた。1955年に制定、発表された「文藝春秋漫画賞」(2001年廃止)の第一回受賞作が谷内六郎「行ってしまった子」という抒情的なイラストレーション作品だったことからもこうした「かつてのマンガ観」の存在は看取ることができる(2)。

1964年、戦前から新聞、雑誌で活動していた漫画家たちを中心に設立された日本漫画家協会(3)は、今日まで継続してマンガの創作支援と普及活動、マンガを通じた文化交流をおこなってきた漫画家の職業団体である。昨年、初の女性理事長である里中満智子新理事長の下での新体制となった同協会は、その主要事業のひとつである「日本漫画家協会賞」(1972年設立)の選定と贈賞を通してこのような戦後の「マンガ」観の変遷と直接向き合ってきた。



「日本漫画家協会賞の歴史」展展示パネル。(図版作成: 池川佳宏)

日本漫画家協会賞は“漫画家自身が主催し、受賞作を選定する賞”として同協会が立ち上げ当初から企画していたものだが、その「大賞」受賞作は大賞そのものが2001年に「コミック部門／カーツーン部門」の二部門に分けられるまでは、3分の2以上が一枚モノ（「カーツーン」と呼ばれるイラストレーション、カット的な一コマ作品）であり、じつはストーリーマンガ（コミック）はあまり多くない⁽⁴⁾。そこには「近藤日出造、杉浦幸雄、横山隆一といった「漫画集団」⁽⁵⁾をはじめとする戦前、戦中から活動していた漫画家を主体に設立された漫画家の職業団体⁽⁶⁾という日本漫画家協会の団体としての性格、戦前から引き継がれた「漫画家」のあり方⁽⁷⁾やその「マンガ」観が反映している。

逆にいえば2001年以降「大賞」に「コミック部門」が設けられたこと自体、こうした日本漫画家協会が保持してきた戦前からの「カーツーン」中心の美術的な「マンガ」観、「漫画家」観が所属作家の世代交代や社会通念の変化によって変更を迫られた結果であると捉えることもできるだろう。

現在多くのカーツーン系の漫画家が会員として参加し、またコミックマーケットなどでの同人活動を積極的におこなっているような若い漫画家も入会するようになった（注6参照）日本漫画家協会という団体は、このような戦後の日本社会の中で時に対立し、変容を繰り返してきたいくつもの「マンガ」のあり方が混在し、並列に存在する場になっている。

文化庁が主催する「メディア芸術アーカイブ推進支援事業」のご支援により、筆者を含む調査グループ（幸森軍也、原正人、椎名ゆかり、池川佳宏）は、2015年（平成27年度）より「日本漫画家協会所蔵本・および資料の調査整理・データベース化事業」として、継続的に同協会の所蔵資料、活動についての調査、電子化を含む整理、整備事業をおこなってきた。

その活動の中で私たちがある意味で「発見」せざるを得なかったのも、これまで述べてきたような戦後の日本における「マンガ」の多層的なあり方、ある意味で混沌とした日本漫画家協会という場における「マンガ」の実態である——ギャラリーを借りての展示⁽⁸⁾やデパート等での催事、イベント、美術館等の施設での原画展、文化人としての漫画家の講演や社会貢献活動、海外の漫画家との国際交流など、そこにはコンテンツを見ているだけではわからない、さまざまな漫画家の活動があった。

この事業の調査報告を兼ねた成果発表として、私たちは昨年2018年2月から3月に日本漫画家協会1Fに設けられたギャラリースペースにおいて「ポスターに見る漫画展黎明期」と題する展示をおこなっている。この展示は1968年に日本漫画家協会の主催で当時の「明治100周年記念事業」の一環としておこなわれた（奇しくもこの年は明治150周年である）「漫画100年」展のポスターや80年代、90年代に業施設でおこなわれた「マンガ博覧会」、「まんが大博覧会」といった協会の関与が深いイベントのポスターを展示したもので、あまり顧みられることの無いマンガ関係イベントを振り返る興味深い契機となったと考えている。

なお、これは余談になるが、同展示の準備作業において、「漫画 100 年」展ポスター（シルクスクリーンで刷られたたいへん美しいものだ）の展示許諾を得るために作者である水野良太郎（9）氏に連絡を取らせていただいたところ、協会と疎遠になっていた水野氏がこれを契機として名誉会員として復帰され、展示に合わせて画稿を描きおろしていただいたという感慨深い小事件があった。水野氏は 2018 年 10 月、残念なことにこの展示からほどなくして病没されたが、そのご冥福を深くお祈りしたい。

この「ポスターによる漫画展黎明期」展に続き、2018 年（平成 30 年度）の同事業の成果発表として 2019 年 2 月 25 日から 5 月 31 日までのあいだ同じく日本漫画家協会 1F ギャラリースペースにて前述した「日本漫画家協会賞」について歴史的に振り返る「日本漫画家協会賞の歴史」展を開催している。

今回の展示は先に述べたような日本の戦後「マンガ」観の変遷を反映した日本漫画家協会賞をその選考委員長でもあった 6 人の日本漫画家協会理事長（近藤日出造、杉浦幸雄、加藤芳郎、小島功、やなせたかし、ちばてつや）ごとに受賞作を振り返り、当時の協会会報とともにその受賞傾向や時代ごとの特徴を考察したものだ。

ギャラリースペースでの展示という環境の問題から各期の受賞作は写真パネルによるものだが、明治大学米沢嘉博記念図書館のご厚意により、収蔵されている受賞作と関連資料書籍を集めた棚展示を同館 2F 閲覧室にて連携展示として開催し、こちらでは作品を手に取って読めるようになっている。

手前味噌ではあるが、戦後の日本における「マンガ」の歴史を知る観点のひとつとして興味がおありの方は是非ご覧になっていただきたいと思う。

「日本漫画家協会賞の歴史」展

会期：2019 年 2 月 25 日（月）～5 月 31 日（金）（土日祝祭日休館）

会場：日本漫画家協会 1F ギャラリー（都営地下鉄新宿線曙橋駅 徒歩 2 分）

〒160-0001 東京都新宿区片町 3-1 YANASE 兎ビル TEL：03-5368-3783

開場時間：10:00～18:00 入場無料

明治大学 米沢嘉博記念図書館関連展示

会場：明治大学 米沢嘉博記念図書館 2F 閲覧室

〒101-8301 東京都千代田区神田猿楽町 1-7-1 TEL：03-3296-4554

開館日時：土日祝 12:00～18:00

月金 14:00～20:00（火水木休館）

* 2F 閲覧室のご利用には当日会員登録の手続きと会員登録料金 300 円が必要になります。

（第 7 章は、文化庁「メディア芸術カレントコンテンツ」<https://mediag.bunka.go.jp/>
2019 年 4 月初旬掲載予定）

<注釈>

1. たとえば劇作家の飯沢匡は「マンガ」を「漫分（ユーモア、ギャグなどアイディア的側面）」と「画分（絵画的な側面）」からなる表現だと主張しており、この「漫分／画分」という考え方は他の選考委員も含めて「文藝春秋漫画賞」の選評に頻出する（文藝春秋編『文藝春秋漫画賞の47年』、文藝春秋、2002年）。
2. 同時期（1955年）に現在でいう「ストーリーマンガ」をおもな対象として現在まで続く「小学館漫画賞」も設立されているが、こちらは小学館（1967年以降、小学館設立の「日本児童教育振興財団」との共催）という児童向け学年誌の出版社の主催であり、設立当初の目的が「健全明瞭な少年少女向け漫画の振興」に置かれていた点から、じつは（少なくとも設立当初の）賞としての主旨は「マンガ」そのものの顕彰、振興ではなく、「児童の健全育成」という教育的配慮にあることがわかる。
3. 2014年より公益社団法人化。
4. 第一回から辰巳ヨシヒロ『人喰い魚』が「努力賞」を受賞し、以降も「優秀賞」などの名目で受賞する作品は年を追うごとにストーリーマンガが増えている、ストーリーマンガを無視しているとはいえない。ただ、「大賞」の受賞作品を見るとその評価基準が、近年の『このマンガがすごい！』（宝島社）のようなマンガの年次人気投票企画に見られる「ストーリーマンガ／物語としてのおもしろさ」にあるわけではないことははつきりわかる。
5. 戦前から戦後にかけて新聞、雑誌といったマスメディアで風刺マンガ、イラストレーション、エッセイなど広範な活動をしていた有力な漫画家のグループ。
6. じつは日本漫画家協会は「漫画家の団体」ではあるが、鳥山明や尾田栄一郎のような現在のストーリーマンガにおけるベストセラー作家、人気漫画家はあまり会員として所属していない。これは「職業団体」としての協会の大きな機能のひとつが社会保障、税務相談など会社組織などに所属していないフリーランス（自由業）としての漫画家の社会生活上のサポート業務であり、キャリアの初期にヒット作を出し、成功した漫画家は所属する理由が希薄だということが原因のひとつと考えられる。ただ、ストーリーマンガの場合はマンガ雑誌の新人賞を経て雑誌の専属のようなかたちで若年でデビューするケースも多く、そのような場合、漫画家自身が協会の存在自体を知らないケースも多い。2015年に理事に就任した赤松健氏はこうした若い漫画家、協会相互の利益のためにSNS等で若手作家に協会への参加を呼び掛けており、この活動が功を奏するかたちでここ数年日本漫画家協会は飛躍的に会員数を伸ばしている（2019年現在所属会員数は約1600名）。
7. 当時の「漫画家」はその多くがイラスト、マンガを描くだけではなく、エッセイや座談会企画などで積極的に発言する「タレント」的な側面を持っていた。
8. 一回性が高く記録も残りにくいギャラリー展示は話題になること自体が少ないが、カーツーン系の漫画家グループによるグループ展やストーリー漫画家の原画展、特定のテーマを定めたグループ展など、ベテラン漫画家からネットで活動する若い漫画家（イラストレーター）まで幅広い層が活用しており、「マンガ」においても無視できない役割を果たすようになっている。
9. 漫画家、イラストレーターとして60年代から80年代にかけて幅広い雑誌、出版メディアで活躍。しうきねお、伊藤典夫、豊田有恒、廣瀬正、小鷹信光、片岡義男とのユニット「パロディギャング」での活動や小説の挿絵、グラビア企画、鉄道模型制作などマンガ以外にも多面的な活動をしている。協会では設立初期から「海外部会」の中核メンバーだった。

第8章 今後の展望の課題

小田切博

本協会はこれまでメディア芸術アーカイブ推進事業対象事業として平成27年度、28年度、30年度の3年、本「日本漫画家協会所蔵本および資料の調査整理・データベース化事業」をおこなってきた。

本事業では日本漫画家協会所蔵の各種資料の実態を調査、デジタル化、データ化をおこなっており、それに伴う協会所蔵書籍、資料、会報などの調査を通じて本事業調査を担当した我々は50年近い日本漫画家協会の歴史そのものを調査してきたといえる。

27、28年度の報告書でも述べたように、漫画家の職業団体である日本漫画家協会の歴史はそれ自体が戦後のマンガ史、マンガ観の変遷を反映する側面を持つものであり、本事業はその歴史的営為を物語る資料を保全するとともに、本事業の調査そのものが戦後の日本社会における、マンガや漫画家のあり方、その歴史を問い合わせ直す性格を持ったものだ。

本事業では2018年3月に前二年度の成果をもとに批評、研究においてはこれまであまり触れられてこなかったマンガに関する展示、催事、イベントの協会所蔵のポスターを集めた展示をおこない、2019年2月から（同年5月まで開催）は本年度の成果を含めて日本漫画家協会が主催する「日本漫画家協会賞」の歴史を紐解く展示を作成し、おこなっている。

さらにこれまでの本事業で作成した報告書は日本漫画家協会HP上で公開しており、本事業では展示とレポートのかたちで調査、研究的側面についての成果を公表してきた。

こうした調査、研究面では今後も可能であれば外部の学術機関と連携したシンポジウム、本事業に参加した調査員個々による研究発表などのかたちで今後も継続して成果を公表、還元していきたいと考えている。

いっぽうで本事業は文化庁という公的機関からの助成を受けたものであり、新規に受け入れた書籍の書誌情報の採取やポスター、チラシなどの資料の保存、電子データ化については助成がなくなったあとも協会の業務として継続的におこなう必要のある案件であり、本事業ではメディア芸術データベースという外部データベースへの登録、リンク可能なデータ仕様の設定と具体的な業務工程の策定、そして今後の協会内での業務引き継ぎのための一連の作業のマニュアル化も適宜進めできている。

こうした本事業の持つ「協会所蔵資料の公的アーカイブとの連携」という側面については引き続き未登録書籍の書誌情報データ採取、作業マニュアルの整備をおこなうとともに、未着手だった海外関連資料、自費出版資料のデータ採取工程の具体化もおこなっていく必要がある。

また、以前おこなったポスターのデジタル化、データ採取の経験、情報をもとにチラ

シ、DM等の協会で所蔵され、今後も寄贈されると考えられるマンガ関連のイベント資料についてそのデジタル化とデータ採取をおこない、その一連の工程についてもマニュアル化する必要があるだろう。

データ保全の観点からは、経年劣化が懸念される音声、ビデオテープ等の磁気メディアのデジタルデータ化がおこなわれることが望ましい。

こうした今後の協会内での日常業務につながるような所蔵資料のアーカイブ化に関しては、特に今年度改めて協会倉庫の所蔵品について全面的な調査をおこなったことによって新たに見えてきた面もある。

それは協会主催のイベント用につくられたさまざまなグッズや大サイズの原画作品類、イベント企画や協会自体の運営資料、海外を含む外部団体とのやりとりといった膨大な資料を今後どう取り扱い、保存し、アーカイブ化していくかという問題である。

こうした点、特に経理面を含めた協会運営資料に関しては本事業の範疇を超えた協会内の問題だといえるだろうが、アーカイブやその公共性ということを考えるという意味においてはさまざまな示唆に富むものだ。

この点に関しては事業自体を超えて今後も改めて考えていきたい。

執筆者および本事業担当者 略歴

幸森 軍也（こうもり いくや）

1961年生まれ。関西大学商学部卒業。作家。マンガ研究者。日本漫画家協会顧問。マンガジャパン理事。現在、専修大学客員教授。著書に『そして、またひとり…』『あなたの待つ場所』(角川ホラー文庫)『マンガ大戦争』『ゼロの肖像』(講談社)など。

小田切博（おだぎり ひろし）

1968年、横浜生まれ。フリーランスライター、アメリカンコミックス研究家。松陰大学非常勤講師。著書『誰もが表現できる時代のクリエイターたち』『戦争はいかに「マンガ」を変えるか』『キャラクターとは何か』。共編著『アメリカンコミックス最前線』(小野耕世共編)。

原 正人（はら まさと）

1974年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科フランス文学専攻博士前期課程修了。フランスのマンガ“バンド・デシネ”翻訳者。訳書に『青い薬』(青土社)、バステイアン・ヴィヴェス『ポリーナ』(小学館集英社プロダクション)、マリー・ポムピュイ、ファビアン・ヴェルマン作、ケラスコエット画『かわいい闇』(河出書房新社)など。『はじめての人のためのバンド・デシネ徹底ガイド』(玄光社)監修。

池川 佳宏（いけがわ よしひろ）

株)寿限無 文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業マンガ分野コーディネーター(2011～2014年)、文化庁メディア芸術所蔵情報等整備事業マンガ分野コーディネーター(2015～2018年)。出版社・IT企業勤務後、(株)コンテンツワークスにて、講談社・小学館などと提携する絶版コミックオンデマンド復刊サービス「コミックパーク」の運営を担当し、8000冊のマンガを復刊。2011年度より、(株)寿限無にて「文化庁メディア芸術デジタルアーカイブ事業」のマンガ分野コーディネーターを担当し、マンガ所蔵機関が持つマンガのデータベースを作成している。

椎名 ゆかり（しいな ゆかり）

アメリカ・オハイオ州ボーリング・グリーン州立大学大学院ポピュラーカルチャー専攻修士課程修了。英語圏のコミックス翻訳者。平成23年度～25年度、文化庁芸術文化課研究補佐員。訳書に『ファン・ホームーある家族の悲喜劇ー』『ブラック・ホール』『デイトリッパー』(以上、小学館集英社プロダクション)、『モンストレス』(誠文堂新光社)他。東京藝術大学非常勤講師。